

長野県のシダ採集ノート 2

堤 久

H. Tsutsumi: Field notes on ferns from Nagano Prefecture 2

本誌15号に続き、下伊那教育会出版(1973)の「下伊那の植物(中巻)」に新たに加える種について記す。ここで引用された標本は、国立科学博物館の中池敏之先生の同定を経て、同館の標本庫へ納められている。

16. コバノイシカグマ *Dennstaedtia scabra*
(Wall. ex Hook.) Moore

1982年9月27日 飯田市元善光寺(500m)

東北地方の南部から、四国・九州に分布するワラビ科の暖帯性常緑シダである。本種は、木曽地方の阿寺溪谷、柿基溪谷等で見出ししてきたが、下伊那地方では初採集である。

産地は、北向き斜面のヒノキ植栽林地である。この林で、マルバベニシダ・ヒロハイヌワラビ・オオベニシダ・オオフジノオ・フジノオシダ・トウゴクシダ・イワヒメワラビ・ベニシダ等も採集した。

県境から大部入った海拔500mの地で、これだけの暖帯性シダを見ることは珍しいことである。

17. マルバベニシダ *Dryopteris fuscipes* C. Chr.

1982年9月27日 飯田市元善光寺(500m)

1982年2月10日 南信濃村名田熊沢(400m)

1981年7月9日 天竜村坂部(400m)

1981年7月3日 天竜村河内川県境(350m)

関東地方以西、四国、九州に分布するオシダ科の暖帯性常緑シダである。本種については大塚氏(本誌第14号)によって「天竜村伊那小沢」の産地が記録されているが、私も上記のように採集した。

マルバベニシダは、県境の河内川から伊那小沢付近まで、スギ植栽林やアラカシ林の林床によく見られる。元善光寺の産地はやや飛地的で本種の長野県での北限となる。

18. ケヤマイヌワラビ *Athyrium vidalii* forma *pulvigerum* Kurata

1981年7月15日 大鹿村塩川〜三伏峠(1,550m)

1981年6月24日 上村赤石林道(1,200m)

葉の表面に微毛を生じるヤマイヌワラビの一型で、全国に広く分布する。

下伊那地方については、中村武久氏(本誌14号)により、「大鹿村三伏峠」で採集されているが、私も上記のように採集したので付け加えたい。

本種を県下では十数か所で採ったが、ブナ帯から亜高山針葉樹林帯で見出ししている。

19. オンガタイノデ *Polystichum × ongataense* Kurata

1983年2月14日 天竜村坂部(300m)

サイゴクイノデとツヤナシイノデの雑種である。

母種の混生しているアラカシ林の沢筋で一株見出しした。葉軸下面の鱗片は両者の中間を示し、葉柄基部の鱗片に黒色を帯びたものが混じる。科学博物館の中池先生に同定していただいた。

オンガタイノデについては、大塚氏により阿寺溪谷で採集(本誌16号)されており、坂部は第二の産地となる。

20. ミヤマオクマワラビ *Dryopteris polylepis*
× *D. uniformis*

1983年2月12日 豊丘村堀越(650m)

ミヤマクマワラビとオクマワラビの雑種である。

母種の混生しているヒノキ植栽林で採集し、中池先生に同定していただいた。日本草本植物総検索誌、Ⅲ シダ編(1979)に「佐藤達夫が栃木県西那須野で発見」と記されている。両親の中間的な形態を示す。

長野県新産

下伊那地方では、今迄にミヤマクマワラビの雑種はクマオシダ(×オシダ)が、オクマワラビの雑種はフジオシダ(×オシダ)が、採集されている。

21. キメンイノデ(新称)

1984年6月18日 豊丘村鬼面山(1,350m)

鬼面山の溪谷で採集、葉柄基部に黒褐色の鱗片が出るトヨグチイノデの一型である。トヨグチイノデの葉柄の鱗片は、やや褪れた淡褐色を呈し、基部には中央部に濃褐色の縞の入った鱗片が混じることがあるが、本品のように、葉柄基部にサイゴクイノデの鱗片に近い、はっきりとした黒褐色の鱗片が多く出るのを採集したのは、初めてである。

中池先生に見ていただいたところ、「イワシロイノデの一型ミョウコウイノデやイノデモドキの一型ネッコイノデと同じ品種に値する」との御教示をいただいた。鬼面山に産するという意味でキメンイノデと呼称したい。

以上、「下伊那の植物(中巻)」に加える種、21種



キメンイノデ（新称）（豊丘村鬼面山産）
葉柄基部に黒褐色の鱗片が出ることが、特徴である。

について記してきた。更に次の4種を見出したが、これらの種については、今迄に本誌によって大塚氏が触れてきているので、採集記録を記すにとどめる。

22. ヒロハイヌワラビ *Athyrium wardii* (Hook.) Makino

1984年6月2日 喬木村馬場平'(500 m)

1982年4月21日 飯田市元善光寺(500 m)

1981年10月27日 天竜村坂部(400 m)

23. イヌチャセンシダ *Asplenium tripteropus* Nakai

1981年10月16日 泰阜村門島駅付近(400 m)

1982年1月15日 天竜村満島(350 m)

1982年1月15日 天竜村伊那小沢(300 m)

24. オオクジャクシダ *Dryopteris dickinsii* (Fr. et Sav.) C. Chr

1981年6月30日 天竜村平岡ダム西側(350 m)

25. チャボイノデ *Polystichum igaense* Tagawa

1982年2月10日 南信濃村名田熊沢(400 m)

1981年6月30日 天竜村坂部(400 m)

次に、長野県全域についてシダに関する知見を記す。

1. ホソバイヌワラビ *Athyrium iseanum* Rosenst

1981年10月7日 更埴市姥捨(750 m)

東北地方南部以西の陰地に見られるオシダ科の夏緑性シダである。葉柄と葉軸はねずみ色を帯びた緑色で葉の羽片分岐点に軟刺毛が立っている。

本県では、木曽谷で知られているが、上記のスギ植栽林でも採集することができた。昨年(1984年8月)再度訪ずれて確認した。

本種は暖帯性のシダであるが、この地は、冬期積雪があるので、雪によって寒さから保護されて生育しているのであろう。県北部の多雪地帯でも見出される可能性がある。

2. トガリバイヌワラビ *Athyrium iseanum* forma *angustisectum* (Tagawa) Kurata

1982年9月5日 大桑村野尻向(550 m)

ホソバイヌワラビの一型、母種に比べ小羽片の切れこみが深く、裂片先端は芒状にとがっている。上記のスギ植栽林の林縁で採集した品を中池先生に同定していただいた。長野県新産。

3. イワヒメワラビ *Hypolepis punctata* (Thunb.) Mett. ex Kuhn

1981年10月7日 長野市信更町(650 m)

青森県以南の低地に見られるワラビ科の暖帯性のシダである。本県では、木曽・下伊那地方の南部に知られているが、上記のスギ植栽林でも飛地的に産するのを採集した。

この林は直径20~30cmのスギの小さな疎林であるが、他に暖帯性のヒメワラビ、亜寒帯性のミヤマメシダ・オオメシダ・テバコワラビ等も生育していた。時々、植栽林では、このように暖帯性、亜寒帯性のシダが混生している状態が見られる。

また、本種を下伊那郡清内路村の標高900mの山地でワラビと混生しているのも採集することができた。

4. ベニシダ *Dryopteris erythrosora* (Eat.)

O. Kuntze

1984年8月10日 飯山市小菅(600 m)

1984年8月10日 信濃町琵琶島(650 m)

1984年10月8日 白馬村佐野坂(800 m)

1982年8月5日 坂城町新地(550 m)

暖帯の林下に普通に見られるオシダ科の常緑シダである。本県では木曽谷の大桑村以南、伊那谷の宮田村以南に連続的に見られるが、上記のような地域でも採集することができた。

坂城町の産地は十数株に及び、生育もよく葉裏には孢子も着生していたが、他の産地は1~数株で孢子を着生するほど生育していなかった。

5. オオクジャクシダ *Dryopteris dickinsii* (Fr. et Sav.) C. Chr.

1984年8月10日 更埴市姥捨(800 m)

北海道から九州までに分布し、山地林下のやや湿った場所に生育するオシダ科の常緑シダである。

本県では木曽南部に多く、その他に下伊那・北安曇・下高井・下水内から知られているが、上記のスギ植栽林でも一株見出した。

6. オオカナワラビ *Arachniodes amabilis* (Bl.) Tindale

1983年2月20日 天竜村伊那小沢(300 m)

関東地方以西の林下に生育する暖帯性の常緑シダである。本種については「下伊那の植物(中巻)」(1973)には記されているが、「日本のシダ植物図鑑1」(1979)には記されておらず、長野県に於ける存在が不確実であった。上記の地で見出すことによって確認された。

7. ゴテンバイノデ *Polystichum* × *yuyamae* Kurata

1984年5月28日 中川村本郷(500 m)

イワシロイノデとアイアスカイノデの雑種である。

母種の混生するスギ植栽林で一株見出し、中池先生に同定していただいた。両親の中間の形態を示し葉柄基部に濃褐色の鱗片が混ざる。長野県新産。

母種のイワシロイノデは温帯性のシダで県下に広く分布しており、アイアスカイノデは、木曽・下伊那地方に時々見られ、その他、長野市・更埴市・大町市に稀産する。

アイアスカイノデの雑種は県下では今迄に、タカオイノデ（本種×ツヤナシイノデ）1981 堤、ハコネイノデ（本種×サイゴクイノデ）1969 奥原 が知られており、ゴテンバイノデを加えて三種見出されたことになる。他にドウリョウイノデ（本種×イノデ）、ホクリクイノデ（本種×サカゲイノデ）が産する可能性も大きい。

8. サイゴクイノデ *Polystichum pseudo-makinoi* Tagawa

1984 年 8 月 10 日 更埴市姥捨（800 m）

埼玉県以西に産するオシダ科の暖帯性の常緑シダである。葉柄には黒褐色の鱗片が混生し、葉面はつやがなくやや黄色味がかった緑色をしている。

本県では伊那谷や木曽谷南部に産することが知られているが、昨年上記のスギ植栽林で見つけた。

標高は比較的高く、一株しか見当たらなかったが、

生育はよく葉裏には孢子がしっかりと着生していた。

9. ナンゴクナライシダ *Leptorumohra miqueliana* subsp. *fimbriata* var. *narawensis* (Koidz.) Nakaike

1981 年 10 月 19 日 山口県境（400 m）

ナライシダとヒロハナライシダの中間的な性質をもっている常緑性シダである。本県では、ナライシダは温帯の林下に普通に見られるが、ヒロハナライシダは見出されていない。

本種は、ナライシダからは、葉柄、葉軸に鱗片が少ないこと、葉柄が褐色を帯びる場合が多いこと、常緑であることなどにより区別できる。

上記で採集した品を中池先生に同定していただいた。長野県新産である。

参 考 文 献

- 杉本順一 1979 日本草本植物総検索誌シダ編
中池敏之 1982 新日本植物誌シダ編
倉田 悟・中池敏之 1979, '81, '83
日本のシダ植物図鑑 1, 2, 3
田川基二 1952 原色日本羊歯植物図鑑
倉田 悟 1979 日本産羊歯植物論文選集
大塚孝一 1975 信州の羊歯植物研究 1
(長野植研 8 号)

〔新刊紹介〕 正宗敏敬「日本の自生蘭 写真と図第一集」変形判（29×22cm），103 頁，自費出版（500 部限定），10,000 円。

著者の正宗先生は、小学校 5 年生の時以来、ラン科植物に魅了されてきたが、植物学の他方面の研究のため忙しく、ラン科植物写真集のため本格的な準備を始められたのは還暦の頃からだと言われる。本書は、第 4 集まで刊行される予定の第 1 冊目であるが、27 種 1 変種が載せられている。記載も写真もすべて生植物に基づいているので、非常に迫力がある。記載文は、他書と比較して非常に詳細で、他書に記載されていても、御自身の観察で確認できなかった部分については一々ことわり書きをつけられている。写真もすべて先生御自身で撮影されたもので、ラン科の花の特殊な形態がよく判るように、角度を変えて撮られた幾枚もの写真と、蕊柱、唇弁など、花の部分の拡大写真がある。したがって平面的写真から立体的な特徴を想像することができる。また、ラン科植物分類の重要な特徴となる地下部の写真も必要に応じて載せられている。ラン科全体の系統関係については、本書の続刊で、日本産の大部分のラン科植物を記載した後で述べられる予定である。（H.T.）

〔新刊紹介〕 水野瑞夫・米田該典 共著

「家庭の民間薬・漢方薬—薬用植物利用のすべて」B5 判，654 頁，新日本法規，3,300 円。

現代は野草ブーム、漢方薬ブームのこともあり、この種の本が数多く出版されている。その中でも本書は一般の人にわかり易く、かつ漢方薬により親しみ易いようにまとめている。その内容は、初めに漢方薬とはなにかが説明され、第 2 章で、病名や症状名ごとに適応する民間薬・漢方薬が見られる一覧表が掲載され、第 3 章では薬草の採集の仕方や煎じ方が、質問形式で、一般の人にわかり易く述べられている。続いて第 4 章で薬用植物をカラー写真を掲げて、その特徴・形態・採取の仕方、薬効と使い方などを紹介し、更に、主要な漢方処方とその解説を掲げ、最後に附録として植物用語の一覧を掲げるなど、家庭での薬用植物のすべてがわかるようになっている。この本の主要部分をなしている薬用植物とその解説の部分は、カラー写真がとてきれいでページを開いてみるだけでもたのしい。また説明も個々の植物の名前の由来、その薬効がわかり易く書いてあり読み易い。ページ数が多い割には値段も手ごろであり、一読をおすすめしたい。（吉玉）